

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日印刷
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可
平成十八年十二月一日発行
第一九二九号

ホトトギス

十二月号



俳句随想 〔二百九十四〕

汀子

虚子編『新歳時記』で、〈青葉して御目の雫拭はばや〉となっている理由は、虚子編『新歳時記』が『俳諧歳時記』（改造社）の例句を踏襲したからである。『俳諧歳時記』夏の部を担当したのは青木月斗であったが、月斗が例句を選定した時に用いた資料としては、「笈の小文」の〈若葉して御めの雫ぬぐはばや〉と「笈日記」及び「泊船集」の〈青葉して御目の雫拭はばや〉の二つの形があったが、月斗は「笈日記」の「青葉」の形を選択したのである。その為に、「笈日記」に出ている「詣西大寺」という詞書が自動的についてきたのであろう。それは月斗の見識であったかも知れない。芭蕉が唐招提寺を訪ねたのは陰暦四月のことであったから、月斗は夏の季題の「青葉」を選択したとも考えられる。しかし「笈の小文」に「若葉」とある以上、「若葉」の形も十分に検討しなければならないのは当然である。〈若葉して御めの雫ぬぐはばや〉の句の意味はそもそも何であるか。

旬日記 汀子

平成十七年十二月二日 工業倶楽部

霜月にやうやく辿り着きにけり
冬木立火星を載せてをりにけり
旅疲れかと葛湯溶きくれしこと

十二月三日 芦屋ホトギス会

星を見るための寒さはいとはずに

十二月四日 関西野分会

初雪となるかも知れぬ旅路かな
ポケットにいつも手袋ありにけり
校正を終へ初雪に気づきたる
車にも積んで手袋なりしかな

十二月四日 下萌句会

霜深き里山抜けて秋月へ
凧や明日の旅路を思ひつ、
落葉には雨の華やぎありにけり
川尻に鴨来る頃と思ひつ、
雪積みて来し車あり峠越え

十二月五日 ロイヤル俳壇

白菜の半分のその半分を
目つむりてめまひありたる寒さかな
遅刻してまでも寒さに対処して
短日の予定狂ひし一事かな

十二月六日 佐用天文台 句会

食堂の近くだけ雪掻かれあり
星を見る旅は雪見となりにけり
初雪に遇ひし喜び齟齬となる
帰路のこと先づは案じてしまふ雪

毛皮着て脱ぎて又着て山の宿

星博士雪雲払ふすべのなく

十二月八日 清交社

冬ざれの野に太白を置き初めし
風一日落葉片寄せられしこと
雪しづり見て一泊の山の宿

増えてゆく空にマロニエ落葉かな

車まで雪掻きありし山の宿

掃かぬゆゑ庭の冬ざれゆくばかり

日向より日向へ大地冬の蝶

十二月十三日 大阪倶楽部

丁寧に包み焼 諸らしからず
霜枯の庭よりのものとは見えず
眠る山抜けて眠らぬ町へ道
全体を見て霜枯の葉先見る
寒波来てゐるを承知の外出かな

十二月十三日 綿業倶楽部

今日は波穏やかといふ冬の海
枯野来て帰路は枯野に星仰ぐ
荒るる日の旅路は冬の海避けて
枯野より枯野抜けゆく旅路あり
まだ慣れぬ寒さなりけり身ほとりに

十二月十六日 朝日新聞新春詠

足音の確かな響き 去年今年
わがために組み込む時間 去年今年
贈られて手に溢れ抱く冬の薔薇

十二月十六日 時雨句会

マスク又外しては深呼吸して
一枚の玻璃をへだてて爰来る
短日やめまひのいつか治りぬし
六甲の風先立てて爰かな

十二月十七日 野分会

初雪といはれある間に積りけり
ひとたびは消えてゆく初雪として
手袋をどのポケットに入れしかと
十二月二十一日 夏潮句会

庭に出て工事見守るちやんちやんこ

稿債の催促 電話年の暮

選句して作句して年逝かんとす

風邪などと云うてはをれず電話来し

冬ばらの一氣に開く客の数

ほ、けんとしてあや芒なほいとす

十二月二十四日 悼 河野扶美様

年惜み小国を偲ぶばかりかな

十二月二十五日 悼 新谷根雪様

知床の雪の大地の星として

十二月二十八日 悼 辻是心様

たまはりし思ひ出 偲ぶ年の近く

十二月三十一日 悼 阿部慧月様

たまはりし賀状に偲びあるばかり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年十二月一日 蕉心会忘年会

冬帝の威の触れてゆく水面かな

十二月十日 伝統俳句協会東京・神奈川合同部会

地球病めるごと冬の水黙しけり

蕉像の懐に神還りけり やつちや場の昔を知るや銀杏散る

枇杷の花激しい恋もありました

懐に寒禽をさめ水の黙 下町に溶け込む君のコートかな

十二月二十七日 若水会忘年会

あんたそんな冷たい人やつたんか 大川といふ短日の旅心

極月の夜の電飾に紛れけり

寒禽の水に慣れたる騒きかな 一本の鐵路二本の橋小春

都鳥我も旅人でありにけり

蕉像を包み込んだる小春かな 十二月十二日 アサヒカルチャー若草句会

極月や銀座に夜の蝶舞へり

寒釣の漢虚しく竿を振る 歳晩といふ口実に酒を酌む 風呂吹に君との距離を近づけて

寒釣は餌を取られるためにする 街の色変りかはりて年の暮 都鳥言問橋は何問はん

寒釣に使ひ切つたる腕かな 夜廻りの闇引き締めてをりにけり 風呂吹を吹けば海鳴り遠ざかる

十二月六日 はせを句会忘年会

歳晩のビル一つづつ灯の消えて

十二月二十八日 目黒学園句会

煮凝の舌に崩るる香りかな

十二月十五日 登高会忘年会

電飾にがんじがらめの冬木立

虚子も見し銀座の柳枯れ切らず 着ぶくれを詰めこみ二番線ホーム 猫走り鳥は鳴いて師走かな

冬ざるる銀座の路地の奥の奥 着ぶくられて世に閑りもなき翁 冬木立森は力を抜いてをり

十二月七日 一水会

美しく時を止めゆく霧水かな 美しく時を止めゆく霧水かな ビル天に伸び切つてより町師走

雑詠

廣太郎 選

白き歯の 見えて 勝利の 日焼顔 神戸 涌羅由美
 薫風を 大きく 孕む 優勝旗 同
 虹立ちぬ ひとむきと といふ 眩しさに 同
 懐しき 人の 風来る 奈良扇 同 山田弘子
 風もまた 遺品の 一つ 古扇 同
 冷し 酒島の 流儀に 従ひて 同 志鳥宏遠
 ただ 水着 見せた き プール サイドの 娘 同
 小走りに 指より 入る 踊の 輪 同
 浴衣 着て 手足 余して をる 漢 同
 籠枕 あた まの 中を 風の 吹く 東京 内藤呈念
 舟虫の 散つて モーゼの 道開く 同
 舟虫の どこかに 指揮者 ぬるらしく 同
 ヨット 出て 水平線 の 賑は ひぬ 香川 湯川 雅
 夏木 蔭より 夏木 蔭まで 日向 同
 鳴き止む といふも 存在 蟬の 声 同
 滝音の 雨音を 遠ざけて をり 同 坊城俊樹
 黒蟻の 頭 羅漢の 頭とも 東京
 千手 観音 瞳涼しく 伏せて をり 同

母の日の妻の 機嫌をとる ことも 瑞安 小川龍雄
 街騒の 全てが 神田 祭かな 同
 生きること 許されて いる 筈も 同
 夏 海引き ずり 浜へ 上がり くる 龍ヶ崎 今橋真理子
 潮騒へ ぶくらみ ゆける 蟬時雨 同
 鯛雲 押し 寄せて くる 海の 町 同
 今日 は しても 雨の 大暑の 日なり けり 姫路 桑田青虎
 今日 は しても 昼寝 しましめ 句会 なり 同
 足萎 へて 不甲斐 なき 身となり し 汗 同
 浜木 綿を見て 磯辺 には 降り 立たず 福岡 松尾緑富
 浜木 綿や こゝに 玄海 望まるゝ 同
 バス 降りて つゞく 磯道 きり ぎりす 同
 ホバリ ングにも 風格の 鬼やん ま 大阪 林 直入
 リフレ ング 五回が 限度 法師 蟬 同
 地球 にも 最期の あらん 流れ 星 同
 わが 魂を しきり 呼ぶ 夜の 時鳥 神戸 長山あや
 もの 思ふとも なく 深き 梅雨の 灯に 同
 茫茫 と 夜の 奥なる 梅雨の 月 同
 甲州 の 風の 洗礼 青葡萄 同
 甲斐 の 山 甲斐の 漢の 涼しさ よ 同 木暮陶句郎
 皮脱 ぎて 極彩色 の 竹と なる 同
 東京 の 果てに 富士 あり 雲の 峰 同
 雲の 峰 東京 焼野 原で した 熱海 嶋田一步
 吾に 空襲 戦災 日あり 夜の 秋 同

雑詠句評（十一月号より）

美奇・中正・保佳
葉　・むつみ・静龍
憲明・明倫・千鶴子
芳子・廣太郎

藤寝椅子ちらと舟屋の雨の路地 たつの 浅井青陽子

京都府与謝郡伊根浦には、湾をぐるつと取り囲んでいる舟屋群がある。文字通り舟の格納庫で、生活用具の物置場、干物や魚の加工場、漁具の手入れなどもし、海へ間口を開けた生活の場でもある。そんな路地の舟屋を垣間見ながら行くと、藤寝椅子がちらりと見えた。なるほど、舟屋には人の暮らしがゆつたりとあった。舟屋の主は雨に漁へも出ず、藤寝椅子に海を見ていたのかも知れない。からつぽの藤寝椅子だったかも知れない。どちらにせよ藤寝椅子を配したことで、人の生活がぱっと目に浮かぶ。何と素晴らしい舟屋の雨の路地の描写であろうか。

（美奇）

恐らく丹後半島にある「伊根の舟屋」であろう。一軒一軒舟のガレージともいえるような場所があり、水面にせり出すように家が建っている。その中で生活をしている人の日常を垣間見た作者の写生である。何の修飾もないところが却って景の拡がりを生む結果となった。（廣太郎）

草取もその人らしく大雑把 長岡 安原 葉

句意は明らかだが、草取りそのものより、その人事めいた側面に焦点を当てたところがユニークだ。「その人らしく大雑把」と大胆に云い切つて、当人の性格や風貌まで目に浮かぶようだ。

考えてみればたしかに、「草取」というのはその人の性格がよく出るものだが、この句にはその人の個性を許し諾つているところがある。ここに、この作者らしい寛容の目差がある。それぞれの人が「その人らしく」生きるという、宗教家としての作者の共生と自足の思想が、この句からうかがうことができる。

表現では、「草取も」の「も」に千金の重みがあつて、十分によく生きている。（中正）

人の性格というのは、その人のすべての仕草にあらわれるものだろう。何をするのに「大雑把」な性格の人が「草取」をしているのを見て妙に納得している作者の姿がユニークに伝わってくる。もちろんその姿を見てうんざりしているのではなく、その愛すべき人柄に目を細めているのであろう。（廣太郎）

天地有情

江戸選

夏帯といふ梯の永遠にあり 東京 稲畑廣太郎
 夏帯や彼女が居ればこの席に 同
 大文字意味に溢れし古都の闇 樞原 稲岡 長
 記号とは斯く意味に満ち大文字 同
 五月晴老い極まりて健やかに 豊中 瀧 青佳
 今更に何をか言はん老い涼し 同
 鐘の音の一打に梅雨の明けてゆく 東京 坊城俊樹
 祈るなり五重塔の片陰に 同
 余りにも別れ早しよ十一鳴く 吹田 大橋敦子
 夢なればとて夢ならず明易し 同
 ででむしに学ばむ時空とふものを 同 大橋 暁
 遺影との対話果てなく梅雨長し 同
 梅雨明の近づく椽の葉擦れとも 長岡 安原 葉
 出水てふ不参の客の案じられ 同
 老残の想ひ出八月はや半ば たつの 浅井青陽子
 露けしや露風ゆかりの修道院 同
 古浴衣虚子先生のまろき肩 東京 今井千鶴子
 古浴衣もつとも好み給ひける 同

蟬の穴だらけの山廬なりしかな 姫路 桑田青虎
 色淡きこと惜しみなき水中花 同
 住吉の茅の輪くぐりに夕べ急く 福岡 松尾緑富
 住吉の名越 川岸 祭 かな 同
 千枚田一枚となる青田波 仙台 小島左京
 駄菓子屋の客を持て成す扇風機 同
 空蟬の夕日掴んでをりにけり 大阪 佐土井智津子
 神神の目覚めか三瓶山の雷 同
 一枚の風の青田となる平野 金沢 藤浦昭代
 日差乞ひ日差拒むも梅雨の旅 同
 お遍路の杖足重き私の杖 徳島 上崎暮潮
 耳鳴につづく松蟬なりしかな 同
 天涯へ伸ぶ九十九折遍路径 相模原 木村享史
 阿波人のやさしさをお遍路の言ふ 同
 人間にたましひ森に閑古鳥 熊本 岩岡中正
 かなしめば空また虹をかかげけり 同
 朝の間の風の軽さは秋のもの 神戸 長山あや
 頭脳澄む秋を恃める仕事かな 同

天地有情句評

汀子

夏帯といふ俳の永遠にあり 東京 稲畑廣太郎

暑い時もきりりと夏帯を結んだ美しい俳は作者の心から永遠に消えることがない。

大文字意味に溢れし古都の闇 樋原 稲岡 長

八月十六日の京都五山の送り火である大文字の燃える闇の特別の感慨を持つ作者。

五月晴老い極まりて健やかに 豊中 瀧 青佳

矍鑠と老いて健やかにある日は五月晴と言いたい作者。「老い極まりて」と自分を見極める力強さ。

鐘の音の一打に梅雨の明けてゆく 東京 坊城俊樹

鐘の音の一打に心を込めて撞く作者の願いが叶いつつある。

余りにも別れ早しよ十一鳴く 吹田 大橋敦子

人の世の突然の別れは何とはかなく無情であろうか。慈悲心鳥の鳴く声も悲しい。

遺影との対話果てなく梅雨長し 吹田 大橋 晁

愛する妻の遺影と対話をして果てない悲しみに籠もる作者の心情は深い。季題が語っている。

梅雨明の近づく椽の葉擦れとも 長岡 安原 葉

椽の緑の大きい葉に渡る風の音に梅雨明けを知る作者の感性。

露けしや露風ゆかりの修道院 たつの 浅井青陽子

たつの詩人三木露風のえにしの修道院を訪ねた作者の感慨。

古浴衣虚子先生のまろき肩 東京 今井千鶴子

肌に馴染んだ古浴衣が好きだった虚子の体型を懐かしむ作者。

蟬の穴だらけの山廬なりしかな 姫路 桑田青虎

真夏の山廬を包む蟬時雨の数だけ蟬の穴が開いていることに気がついた作者。